PROJECT豊夢

【事後評価報告書】

1.基本情報

1）実行団体　NPO法人　コバルトブルーライフセービングクラブ下関

2）実行団体事業名　プロジェクト豊夢

3）資金分配団体名　公益財団法人　ブルーシー・アンド・グリーンランド財団

4）資金分配団体事業名　障害児等の体験格差解消事業

5）事業の種類　草の根活動支援事業

6）実施期間　　2020年5月～2023年3月

7）事業対象地域　山口県内

2.事業概要

①事業によって解決を目指す社会課題と想定される直接対象グループ

　親子での余暇時間の確保や経済的な困窮など、日常生活に困難を抱える家庭にある子どもにおいては、様々な体験の機会損失が生れ、自尊感情に繋がる自己肯定感や自己効力が高まらず、子ども期に育まれるべき非認知能力＝『生き抜く力』の発育の阻害因子となっている。
　生活環境の格差から非認知能力の差が生まれやすい社会構造上の課題に対して、非認知能力を育むプログラムを実施する。
　体験の格差が生じやすい環境にあるひとり親家庭を直接対象グループに指定。

②事業の概要（中長期アウトカム・短期アウトカム・活動）
　ひとり親家庭の子どもたちが家庭内のセルフケアが十分になくとも、悩みや困り事などを友人や大人等に相談し、乗り越えられる力を身につけられるように、自己肯定感や親子関係の良化を図るため、水辺の活動を通したコミュニケーションプログラムを実施。

③出口戦略
　子どもの非認知能力の発育や親子関係の良化を支援するプログラムの成功事例を確立する

Theory of change

究極成果

プログラムに参加する親子が社会から孤立しないソーシャルスキルを獲得できる

長期成果

悩みや困り事などを友人や大人等に相談し、乗り越えられる

非認知能力が高まる

親子関係が良くなる

途中成果

（親）子の自己肯定感が高まる

評価＆継続
参加促進

非認知能力が低い子がプログラムに参加する

評価＆継続
参加促進

プログラム実施

ひとり親家庭にプログラムの参加を呼び掛ける

参加募集

C.Bと皆繋がソーシャルスキルを習得する為の体験プログラムの開発に向けて連携・協働する

©2020 minatsunagi.org

3.事後評価実施概要－１

（１）実施概要

子どもの人間関係から生じる自尊感情や、様々な非認知能力の変化を測定

◎短期アウトカム１～３の評価

１）調査方法

・アンケート調査

２）調査実施時期

・各年プログラム提供の前後に記入。

３）調査対象者

・事業の対象となった23人に対し実施。すべてのプログラムに参加し、回答項目記入漏れがない回答者数10名（子ども5人，親5人）（回収率43.5％）であった。

４）分析方法

・アンケートの各項目別に集計しグラフ化した。また、参加者の平均値をグラフ化した

各年のプログラム開始前のアンケート結果を比較することで、プログラム参加をきっかけに自尊心の向上やそれが及ぼす日常的な変化に影響できたかを推定し、プログラムの効果有意性の判断を行った。

3.事後評価実施概要－2

（２）実施体制

内部　理事2名　新名　文博　代表理事
　　松本　伊織　理事

外部・評価担当　林　陽一郎　認定NPO法人　皆繋　代表理事

4.事業の実績－1

４－１　インプット

（1）人材

内部　2名、外部5名、ボランティア のべ75名（有償 のべ60 名　無償 のべ15名）

（2）資機材

非接触型体温計（コロナ対策）、無線機用防水ケース、バナナボート　など

（3）経費実績

助成金の合計　4,302,000円

①契約当初の計画金額　4,302,000円

②実際に投入した金額　4,067,823円(R5.1.27時点)

（4）自己資金　約1,400,000円

①契約当初の自己資金の計画金額　1,095,000円

②実際に投入した自己資金の金額　約300,000円

③資金調達で工夫した点

・本プロジェクトのアクティビティの様子を動画にまとめ、活動のPRを行った。

・様々な社会奉仕連合団体の例会等に赴き本プロジェクトへの協賛をお願いした。

4.事業の実績－2

４－２　活動とアウトプットの実績

（1）主な活動

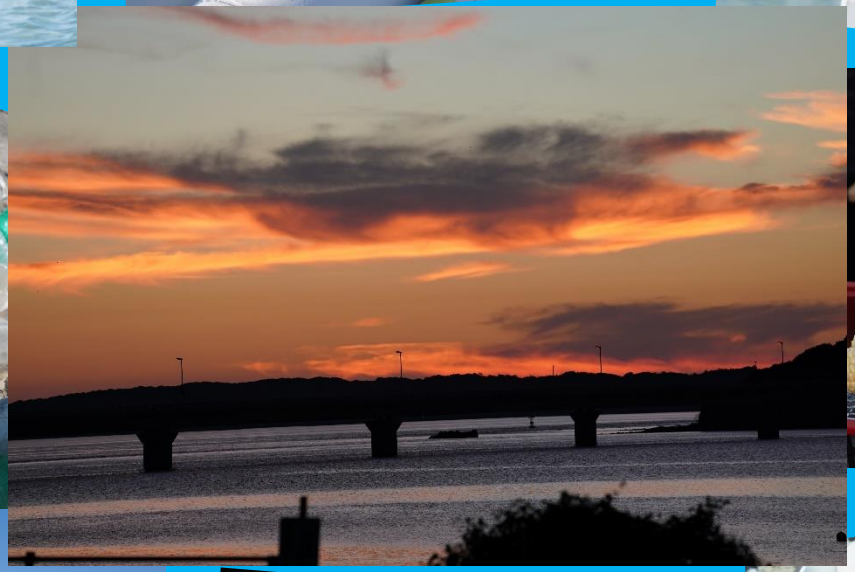
①子どもが体験を心から楽しみ、満足・幸福感を通して肯定的感情を得る活動

②親が、子どもとの活動を通して、親としての満足・幸福を感じ、親子関係の良化に繋げる活動

③同じ境遇の仲間ができ、精神的に孤立感の解消や社交性が向上する活動

④本プロジェクトに関わる子育て支援団体等との信頼関係が築け、福祉抵抗性の改善や互助意識が芽生える活動

①～④をSUP・サーフィン・バナナボート牽引・水上バイク・カヤック・海水浴などの水辺のアクティビティを提供。その他にビーチクリーン・温泉入浴・BBQ、お泊り体験等実施。また、子どものプログラムとしてスイカ割り、手持ち花火、朝食づくりを実施。親のプログラムとして焚火を囲んだ座談会などを実施。



B&G
Blue sea and Greeland Foundation

4.事業の実績－2

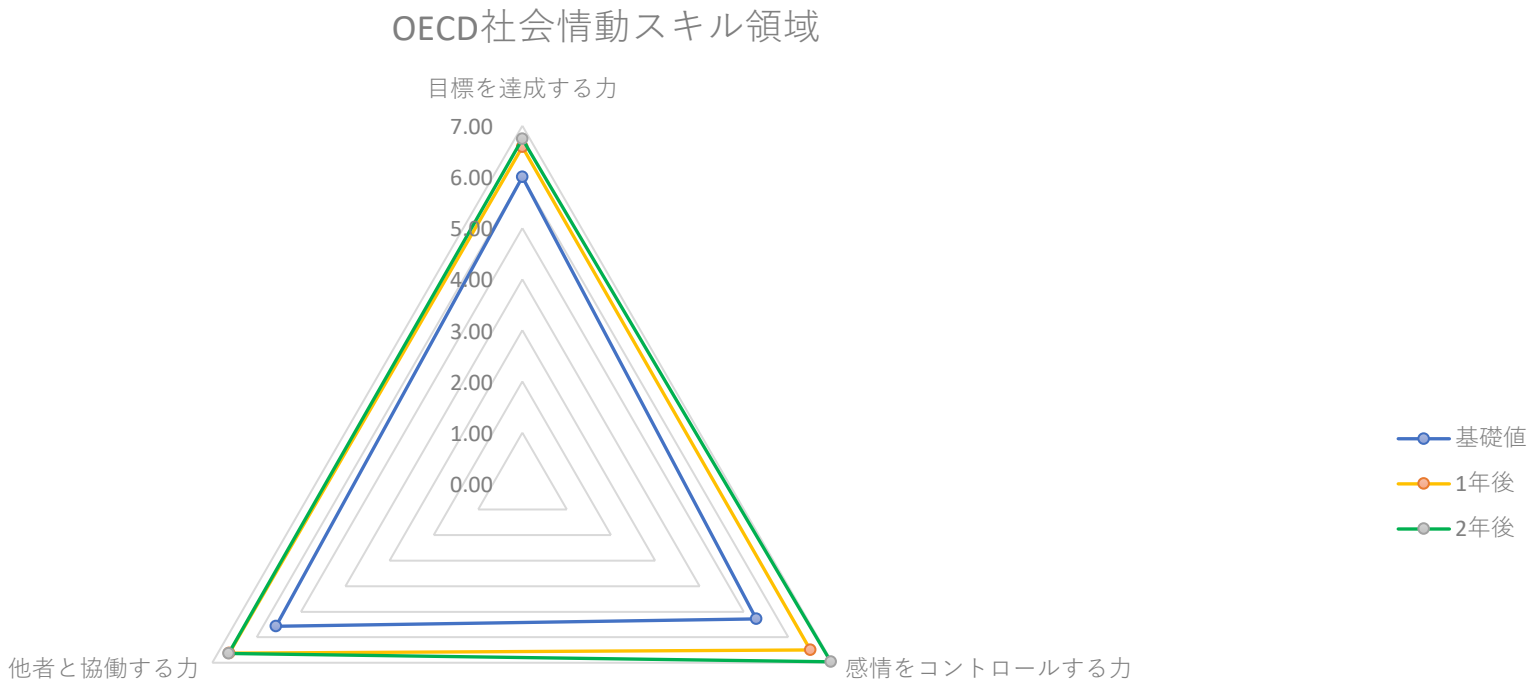
４－２　活動とアウトプットの実績
（2）アウトプットの実績

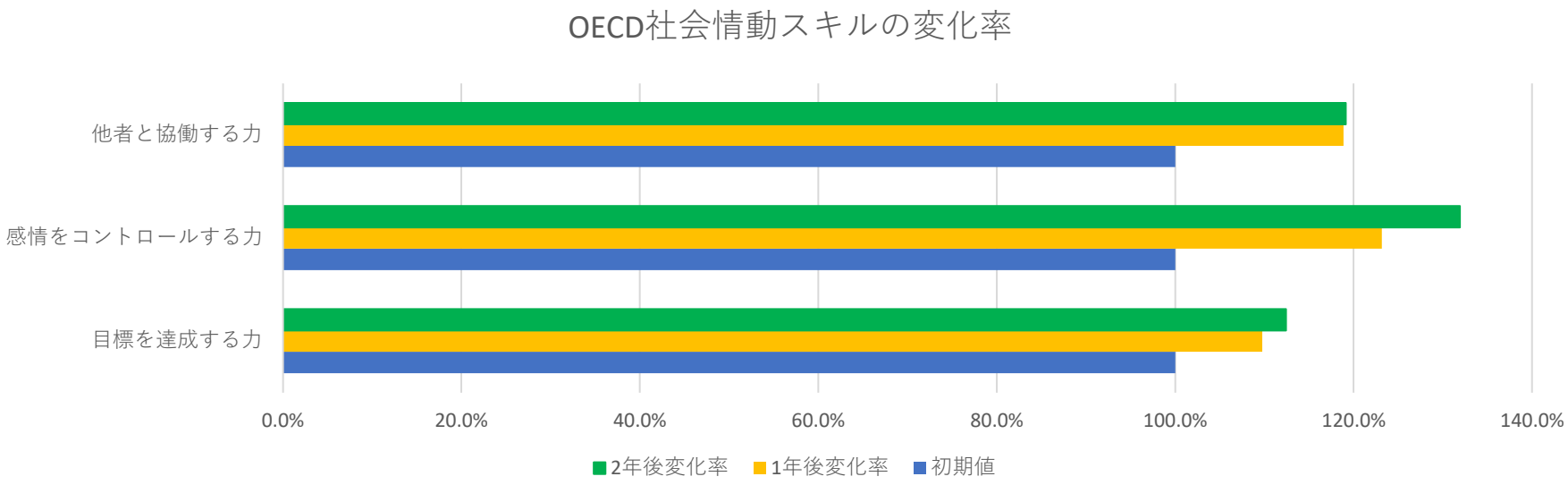
①アウトプット	②指標	③初期値/初期状態	④目標値／目標状態	⑤目標達成時期
１　こどもが体験を心から楽しみ、満足・幸福感を通して、肯定的感情を得る	①水辺の体験や野遊びの体験に参加した子どもの数 ②水辺の体験や野遊びの体験に参加した子どもの満足度	①参加人数 ②プロジェクト申込時ベースライン自己評価 ③プロジェクト申込時ベースライン調査	①参加人数の継続率：目標８０％以上 ②こどもの自己評価中間評価調査（自己肯定評価項目が向上する（ベースライン（BL）比） ③親の中間評価調査（親から見る好転評価項目が出る（BL比）	2021年2月
２　親が、子どもとの活動を通して、親としての満足・幸福を感じ、親子関係が良化する	①水辺の体験や野遊びの体験を見学した保護者の数 ②水辺や野遊びの体験を見学した保護者の満足度	①参加人数 ②プロジェクト申込時ベースライン調査	①参加人数の継続率：目標８0％以上 ②親の中間評価調査（親から見る好転評価項目が出る（BL比）	2021年2月
３　同じ境遇の仲間ができ、精神的に孤立感の解消や社交性が向上する	①水辺の体験や野遊びの体験を見学した保護者の数 ②水辺の体験や野遊びの体験を見学した保護者の満足度	①参加人数 ②プロジェクト申込時ベースライン調査	①参加人数の継続率：目標８0％以上 ②親の中間評価調査（親から見る好転評価項目が出る（BL比）	2021年2月
４　本プロジェクトに関わる子育て支援団体等との信頼関係が築け、福祉抵抗性の改善や互助意識が芽生える	①水辺や野遊びの体験を見学した保護者の数 ②水辺や野遊びの体験を見学した保護者の満足度	①参加人数 ②プロジェクト申込時ベースライン調査	①参加人数の継続率：目標８０％以上 ②親の中間評価調査（親から見る好転評価項目が出る（BL比）	2021年2月

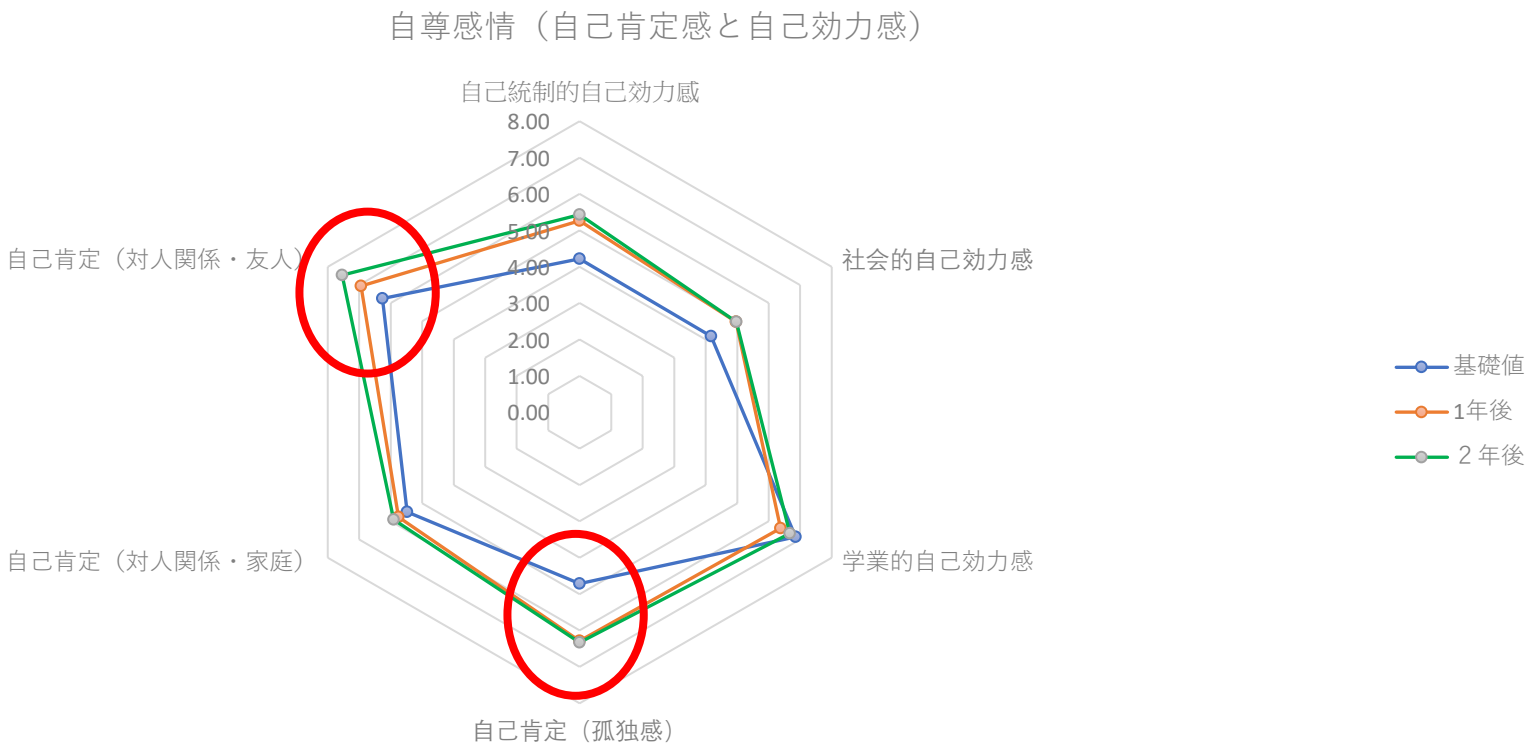
4.事業の実績－２

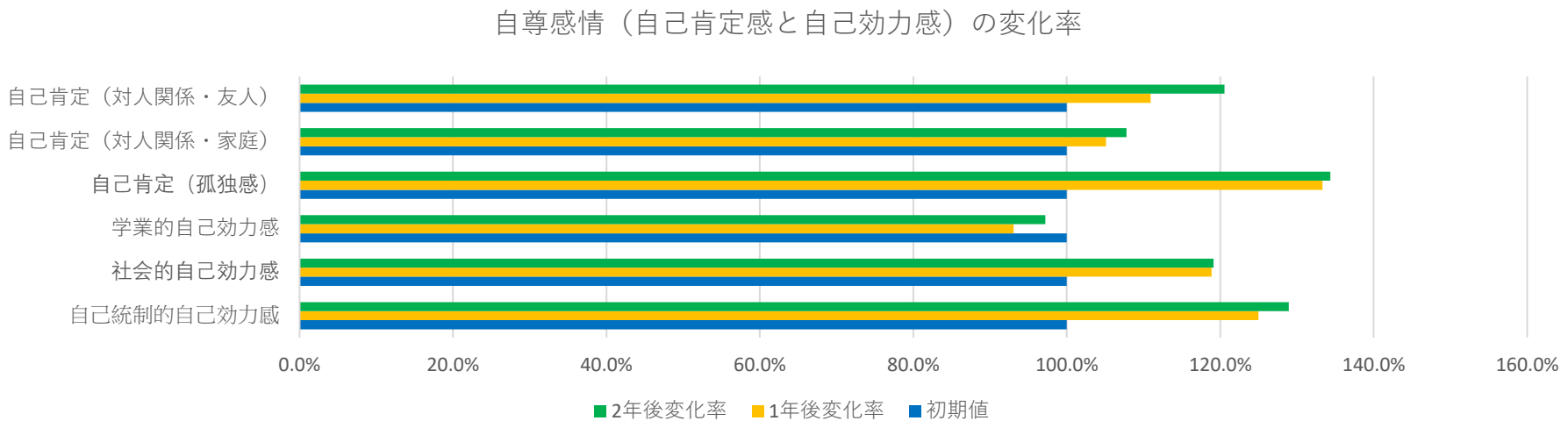
（2）アウトプットの実績

①アウトプット	④目標値／目標状態	⑤実績値
1　こどもが体験を心から楽しみ、満足・幸福感を通して、肯定的感情を得る	①参加人数の継続率：目標８０％以上 ②こどもの自己評価中間評価調査（自己肯定評価項目が向上する（ベースライン（BL）比）	①初回参加人数:9家庭27名　親9名　児童16名　乳幼児2名　最終回参加人数5家庭14名　親5名　対象児童　7名　乳幼児2名 継続率51.9% ②自尊感情（MAX48-MIN6）スケール平均初期値31.7 スコア　1年後35.6スコア（成長率BL比112.3%）、2年後36.9スコア（成長率BL比116.4%）
2　親子の共同活動を通して、満足・幸福を感じ親子関係が良化する	①参加人数の継続率：目標８0%以上 ②親・子の中間評価調査（BL比）	①上記同　継続率51.9% ②子どもから見る親子関係の程度（MAX8-MIN1）初期値5.48 スコア、1年後5.76スコア（成長率BL比105%）、2年後5.90スコア（成長率107.7%）
3　同じ境遇の仲間ができ、精神的に孤立感の解消や社交性が向上する	①参加人数の継続率：目標８0%以上 ②親の中間評価調査（親から見る好転評価項目が出る（BL比）	①上記同　継続率51.9% ②子どもから見る孤独感の解消の程度（MAX8-MIN1）初期値4.71スコア、1年後6.29スコア（成長率BL比133.5%）、2年後6.33スコア（成長率BL比134.4%） 親から見る地域との繋がり意欲（MAX8-MIN1）初期値6.5スコア、1年後7スコア（成長率BL比107.7%）、2年後5スコア（成長率BL比76.9%）3年目活動後7スコア（成長率BL比107.7%）
4　本プロジェクトに関わる子育て支援団体等との信頼関係が築け、福祉抵抗性の改善や互助意識が芽生える	①参加人数の継続率：目標８０％以上 ②親の中間評価調査（親から見る好転評価項目が出る（BL比）	②地域活動参加意欲・福祉サービス利用意欲・地域との繋がり意欲・共助・互助意識からなるスコア合計点（MAX32-MIN4）初期値26点、1年後２6スコア（成長率BL比100.0%）、2年後21スコア（成長率BL比80.7%）、3年目活動後29スコア（成長率BL比111.5%） 定量データ考慮　コロナの影響により、項目に対して大事ととらえるが必要とできないといった背景があり、この評価項目の経過の妥当性・正当性は不透明。 定性的実績　参加者同士の関係性が構築されLINEで連絡を取る、一緒に家族ぐるみで遊ぶなどの交流が生まれる。また、皆繋への相談などもあり、関係構築が進み、一人で抱え込まなくて良くなったという意見もみられる。

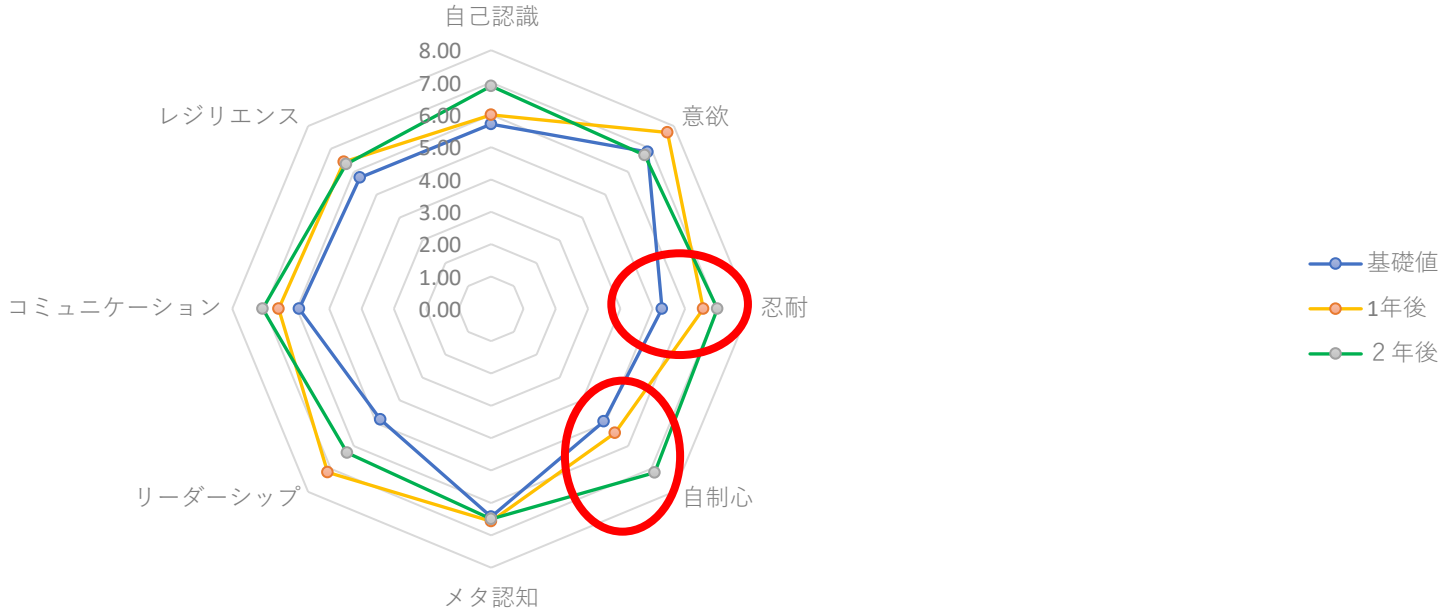

OECD社会情動スキル領域
目標を達成する力
7.00
6.00
5.00
4.00
3.00
2.00
1.00
0.00
他者と協働する力
感情をコントロールする力
基礎値
1年後
2年後


OECD社会情動スキルの変化率
他者と協働する力
感情をコントロールする力
目標を達成する力
0.0%
20.0%
40.0%
60.0%
80.0%
100.0%
120.0%
140.0%
2年後変化率
1年後変化率
初期値

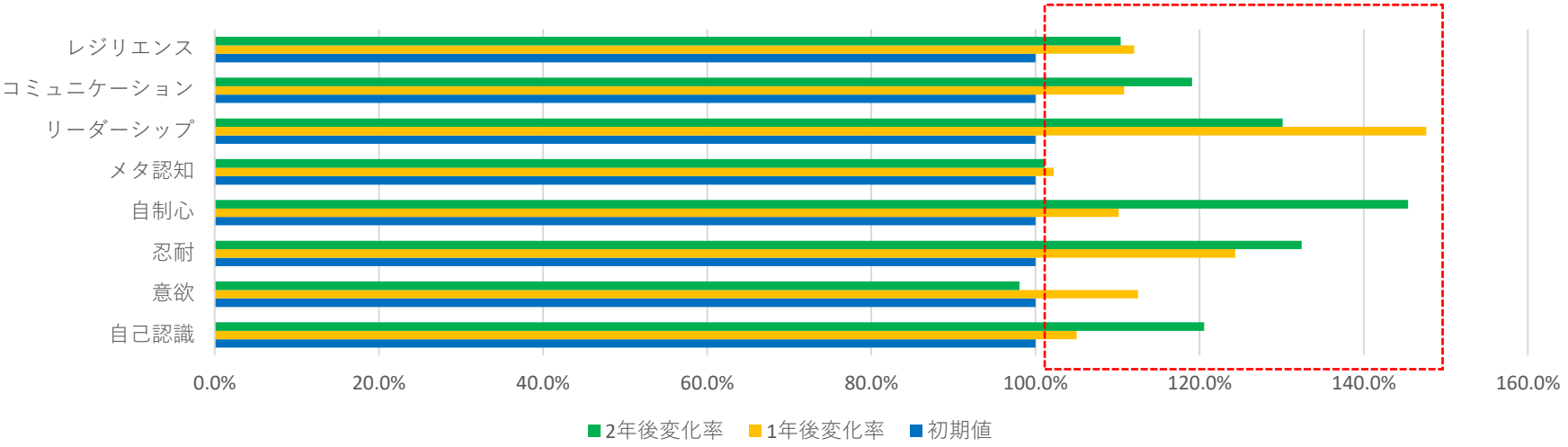

自尊感情（自己肯定感と自己効力感）
自己統制的自己効力感
8.00
7.00
6.00
5.00
4.00
3.00
2.00
1.00
0.00
社会的自己効力感
学業的自己効力感
自己肯定（孤独感）
自己肯定（対人関係・家庭）
自己肯定（対人関係・友人）
基礎値
1年後
2 年後


自尊感情（自己肯定感と自己効力感）の変化率
自己肯定（対人関係・友人）
自己肯定（対人関係・家庭）
自己肯定（孤独感）
学業的自己効力感
社会的自己効力感
自己統制的自己効力感
0.0%
20.0%
40.0%
60.0%
80.0%
100.0%
120.0%
140.0%
160.0%
2年後変化率
1年後変化率
初期値

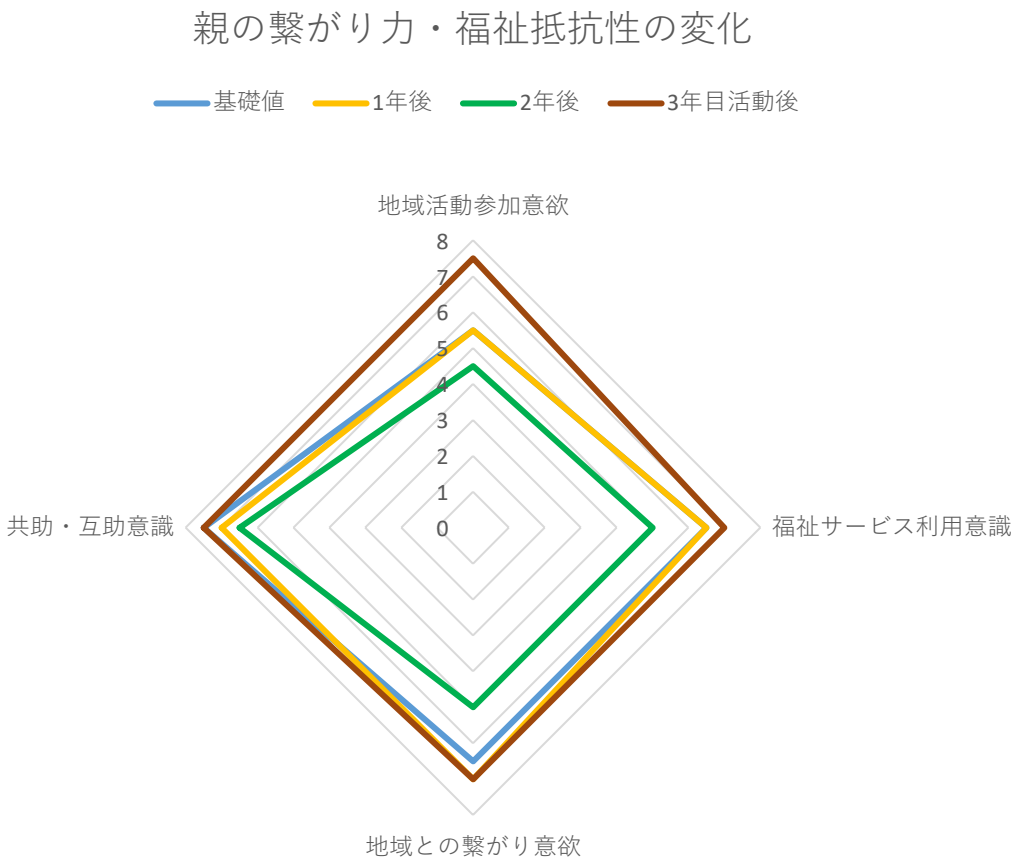
社会情動スキル（スキル別）



社会情動スキル（各スキル別）の変化率

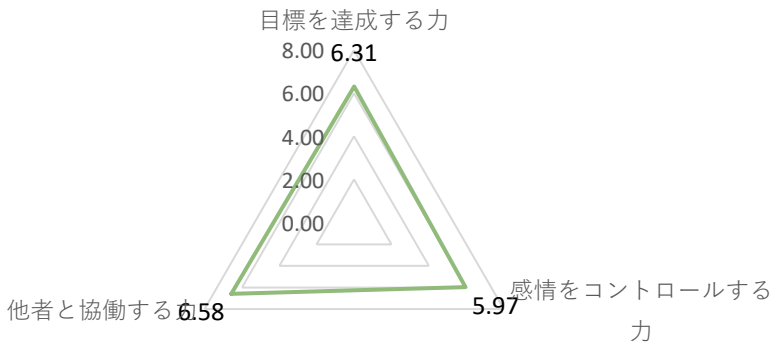


©2022　NPO.MINATSUNAGI

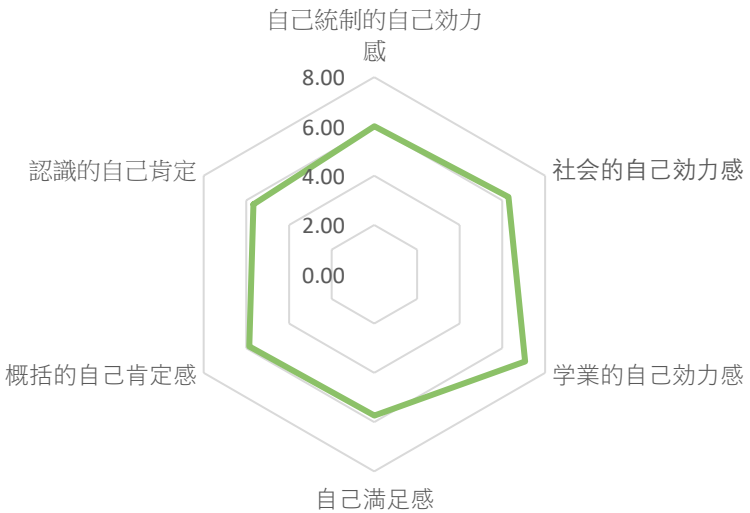

親の繋がり力・福祉抵抗性の変化
基礎値
1年後
2年後
3年目活動後
地域活動参加意欲
8
7
6
5
4
3
2
1
0
福祉サービス利用意識
地域との繋がり意欲
共助・互助意識

プログラム非対照群の活動の結果

OECD社会情動スキル

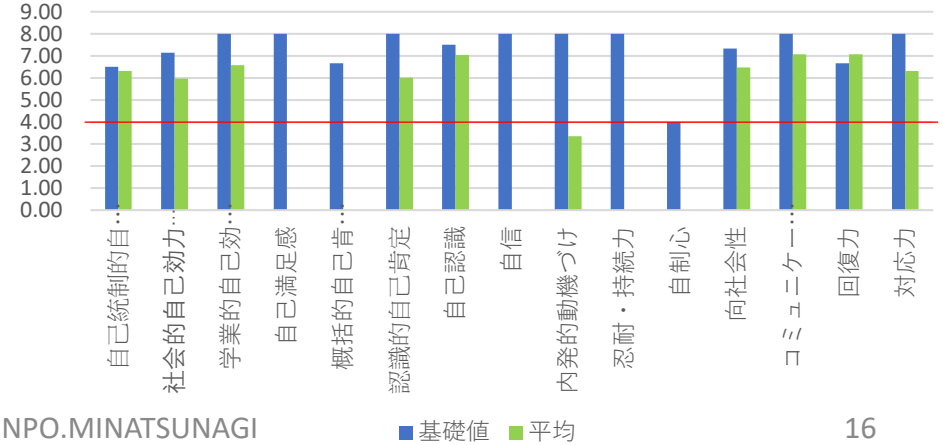


自尊感情



各社会情動スキル別

プログラム参加による非認知能力の達成度



4.事業の実績−3

外部との連携の実績に関して

【ステークホルダーと、その連携について】
事業を実施する上で、安心安全にアクティビティ全般を実施する部分(宿泊を含めて)については、他組織との連携を含めて当NPO(NPOC.B.)が担当し、参加者(子どもたちと親)の呼びかけ～セレクトや評価関連については認定NPO皆繋が対応することで役割を分担し3年間のプロジェクトを遂行した。アクティビティ全般をまとめた動画を製作し、他組織へのPR・協力要請を呼びかけた結果として協賛・協力してくれる組織(企業や社会奉仕連合団体等)に加えて、多くのボランティア(プロボノ・インターンシップ等)を集めることができた。

【ボランティア参加に関する合意形成プロセスについて】
当NPOについては、元々ライフセービング(人命救助)や漂着ゴミの回収等の地域課題解決に関連して、消防士や水　辺の愛好家たちの他、インターンシップを含めた大学生と交流する機会が多かった。そこに、本プロジェクトと地域活性という新しい取り組みを交えることで、更に絆を深め合意形成へと導いていった。

【コレクティブインパクトについて】
人命救助や漂着ゴミの回収に加えて、相対的貧困へのアプローチという異なるテーマが合わさることで多種多様な組織や人材が集まり、それぞれのスキルを発揮することで本プロジェクトを遂行することができた。

5.アウトカムの分析−1

5-1.アウトカムの達成度

（1）短期アウトカムの計画と実績

①短期アウトカム	②指標	③初期値/初期状態	④目標値／目標状態	⑤目標達成時期
1　ひとり親家庭の子どもたちが本プロジェクトにより、非認知能力を高め、自尊心の向上、対人関係のより良い構築の兆しが見え始める状態になる	①参加児童の対人関係性（自己評価・親・プロジェクトメンバーの各評価） ②子どもたちの社会性や自尊心の変化	①プロジェクト申込時ベースライン自己評価 ②プロジェクト申込時ベースライン調査	①こどもの自己評価最終評価調査（自己肯定評価項目が最も向上する（ベースライン比）	2023年2月
2　親子の関係がより良い状態になる	①親子の関係性の変化	①親子の日常の行動・活動の変化、イベントに対する意識の変化 ②プロジェクト申込時ベースライン自己評価 ③プロジェクト申込時ベースライン調査	①ひとり親家庭の親と子それぞれが関係が良くなったと実感することができる(ベースラインとエンドラインの比較)	2023年2月
3　親の他者への信頼性が増し、日常的な安心感が生まれた状態になる	①他者との関係性・頼れる存在・日常の精神的な状態等の変化	①プロジェクトメンバーへの連絡・相談など実際に行動ができるか ②プロジェクト申込時ベースライン調査	①福祉抵抗性や互助に対する意識の変化、他者とのコミュニケーションを通した自身の価値観の変化(ベースラインとエンドラインの比較)	2023年2月
4　プロジェクトに無関係な人たちがプロジェクトについて少しずつ知ることとなり、協力や支援をしてくれる新たな人材と出会うことができる状態になる	①本プロジェクトにスタッフとして参加してくれる人たちや組織の数	①本プロジェクトを当NPOとNPO法人 皆繋で対応している状況	①まちづくり協議会や地元の大学や高校の他、企業など本プロジェクトに無関係な組織の理解を得ることができ、新たな連携・協力・支援を行う団体等が増加し、〝教育のまち豊北〞として地域活性化へと繋がっていく	2023年2月

5.アウトカムの分析−1

5-1.アウトカムの達成度

（1）短期アウトカムの計画と実績

①短期アウトカム	④目標値／目標状態	⑥アウトカム発生状況
1　ひとり親家庭の子どもたちが本プロジェクトにより、非認知能力を高め、自尊心の向上、対人関係のより良い構築の兆しが見え始める状態になる	①こどもの自己評価最終評価調査（自己肯定評価項目が最も向上する（ベースライン比） ②親の最終評価調査（親から見る好転評価項目が最も高くなる（ベースライン比） ③体験後の集合写真や動画を撮影し、体験前のものと比較し子どもたちの変化を分析する	①自尊感情（MAX48−MIN6）スケール平均初期値31.7 スコア　1年後35.6スコア（成長率BL比112.3%）、2年後36.9スコア（成長率BL比116.4%）と参加児童の自己肯定感・自己効力感の成長がみられた。定性的にも、参加児童同士の協力や、話を聞く場での自制など成長を感じる場面が目立った。
2　親子の関係がより良い状態になる	①ひとり親家庭の親と子それぞれが関係が良くなったと実感することができる(ベースラインとエンドラインの比較)	①子どもから見る親子関係の程度（MAX8−MIN1）初期値5.48 スコア、1年後5.76スコア（成長率BL比105%）、2年後5.90スコア（成長率107.7%） 定性的には、1年目の活動の参加を機に、親子互いに素直になれた。良いきっかけになった。みんなの（生活の）話を聞けて、一人で悩んでもしょうがないと感じて、精神的に楽になったなど、機転になったという意見が聞かれた。
3　親の他者への信頼性が増し、日常的な安心感が生まれた状態になる	①福祉抵抗性や互助に対する意識の変化、他者とのコミュニケーションを通した自身の価値観の変化(ベースラインとエンドラインの比較)	親から見る地域との繋がり意欲（MAX8−MIN1）初期値6.5スコア、1年後7スコア（成長率BL比107.7%）、2年後5スコア（成長率BL比76.9%）3年目活動後7スコア（成長率BL比107.7%） コロナの影響で、他者との交流が難しい。生活も不安定になった。この活動の機会がなければ、夏の思い出は何もないところだった。みんなと再会できたのも嬉しいし、子どもたちも楽しみにしてきた。良い仲間ができた。等意見があり、コロナの影響によって、他者との距離がさらに広くなりつつも、1年目の活動の機会が支えになったという評価は全員一致するところであった。
4　プロジェクトに無関係な人たちがプロジェクトについて少しずつ知ることとなり、協力や支援をしてくれる新たな人材と出会うことができる状態になる	①まちづくり協議会や地元の大学や高校の他、企業など本プロジェクトに無関係な組織の理解を得ることができ、新たな連携・協力・支援を行う団体等が増加し、〝教育のまち豊北〞として地域活性化へと繋がっていく	**本プロジェクトの様子(親子で海岸清掃やアクティビティ・BBQを楽しんでいる)をまとめた動画(youtnbe掲載:https://www.youtube.com/watch?v=WS89S3IVjuI)を見た他大学関係者より連絡が入り、サービスラーニングという仕組み(インターンシップの発展版)により地域課題解決に向けて協働したいという申し出があり、現在契約を締結しようとしている状況になっている。**

5.アウトカムの分析－2

（2）アウトカム達成度についての評価
波及効果

参加家庭同士の交流が深くできたことで、親同士がコミュニケーションアプリでグループをつくり、連絡を取り合うといった繋がりができた。これによって、小さな困りごとなどを互いにアドバイスするなど互助意識や孤立感の解消につながったと感じる。特に、父子家庭同士の家庭は、同じ境遇にある仲間づくりの機会が今まで全くなかったという事で、より深いつながりを持て、結果的に大きく日常生活の安定基盤となったようである。

5.アウトカムの分析−2

事業の効率性

助成していただいた資金は、活動を実施していくために無駄なく活用できた。特に私たちはひとり親家庭の子どもたちを海に招き、海岸清掃やマリンアクティビティを通して元気になる様子をまとめた動画を毎年作成。本プロジェクト１年目を経て子どもたちの非認知能力の変化が可視化された資料や、プログラムの様子をまとめた動画を目の当たりにした時の反響の大きさが全く違ったことに驚かされた。子どもたちが社会で生き抜くための力を種類別に整理し数値化され、向上していく様子が手の取るように解ることでこれまでは関わりのなかった個人や組織が協力・賛同してくれるようになったのはまさに本プロジェクトの最大目標であったセオリーオブチェンジに繋がった瞬間だったと自負している。
かつて私たちが実施していた具体的な目標設定をもたず子どもたちが笑顔になって帰っていくことをビジョンとした取り組みと、本プロジェクトのようにプログラム中に具体的なミッション設定を行ったことで子どもたちの非認知能力の伸び具合が著しく違うことが解ったことも大きな成果の一つだと思っている。
　３年間の活動においては年々参加者親子の数が減っていくことがわかる。その最も大きな理由として、参加当初は学校に行くことが困難な状況に直面していたような子どもたちが、本プロジェクトに参加することで物事に前向きに取り組むことにつながり、結果的に部活動の大会開催日程と本イベント実施日が重なったために参加することができなくなっていき、参加者数が年々減少していったことが挙げられる。つまり本プロジェクトの大きな目標の一つである子どもたちの非認知能力が向上したことが皮肉にも本イベントに参加できなくなった最大要因となったことを特筆すべき成果として挙げたい。

6.成功要因・課題

成功要因

水辺や野外活動を通した特別な体験をエスコートする団体：コバルトブルーと、子どもの社会性スキルの発達段階においての知見のある子育て支援団体：皆繋との協働により、効果的なプログラム提供が実施できたことは大きな成功要因である。それぞれの強みを生かしたコミュニケーションアプローチが効果的にアウトカムを生みだした。
ひとり親の抱えやすい困難のロジックを読み解きながら事業立てすることで、ベースライン調査とエンドライン調査の項目が事前に建てることができ、定量的な評価ができたことは、活動の価値評価に直結すると考える。

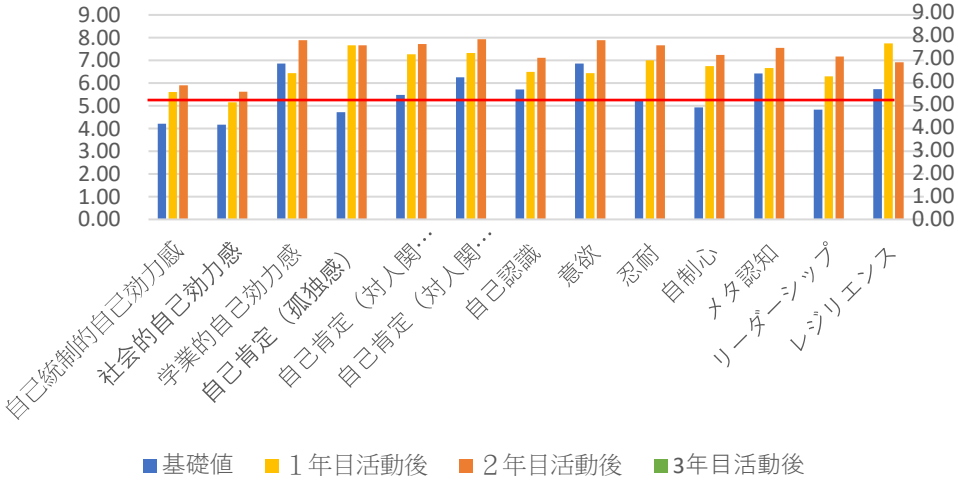
課題

このプロジェクト期間はCOVID-19の影響により、今までの他者とのフィジカルな距離感やコミュニケーションの在り方に制限や変容を生み出してしまった。これらの影響により、より効果的に取り組めたであろうプログラム提供が困難になったり、参加家庭においても他市からの参加に制限をかけざるを得なくなったり、不参加になるなどの影響もあった。また、衛生面の対応なども様々な面で手間とコストが必要になったことも大きい。

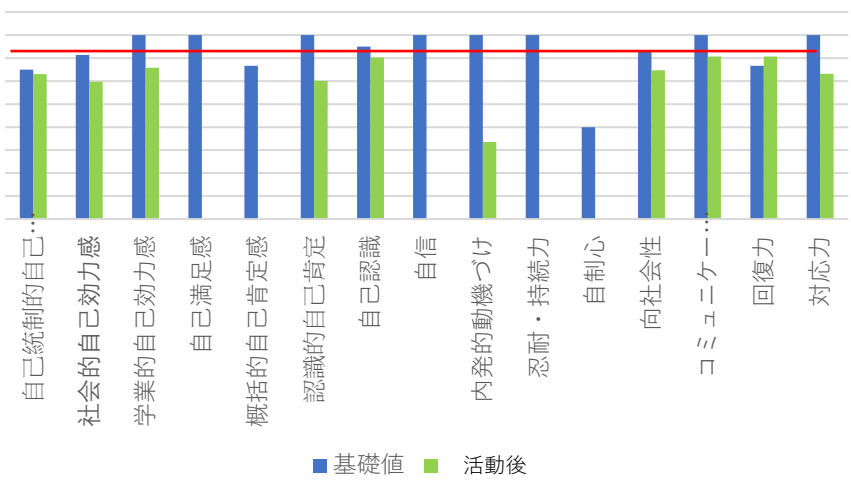
7.その他深掘り検証項目

検証として、好転的なアウトプットが、果たしてどの程度、本プログラムが影響を与えられたのか、その検証にもアプローチをした。
本プログラムに参加した群Aと、非プログラム参加群Bとの比較を行った。
A群は『ひとり親家庭』、B群は『一般家庭』であること。また、アンケート内容と非認知能力の区分が両群でやや相違があることを前提に、参考として比較する。
　まず、ベースライン平均（赤線）がA群よりB群のほうが、全体的に高値であったことで、自己評価レベルでは、ひとり親家庭の子どもは低い傾向にある可能性がある。
活動後は、各非認知能力に関して、どの程度発揮できたのかをアンケート集計した。各非認知能力を意識づけしたA群は達成度が高く現れたが、意識づけをしていないB群においては達成感がA群程見られなかった。両群ともに、活動に対しての楽しさ、満足度はほぼ満点であった。楽しむ事と、自尊心を育むことや非認知能力を高めることはアプローチによって効果が大きく変わるのではないかと推測する。また、子どもたちの反応や親との対話を通した現場では、このグラフ化よりも明確にその効果の差異を感じたことを付け加える。

プログラム参加群の活動提供後の非認知能力の達成度



プログラム非参加群のマリンアクティビティ提供後の非認知能力の達成度



8.結論－1

（1）事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
（1）事業実施プロセス				○	
（2）事業成果の達成度				○	

9.提言

　本プロジェクトにおいて、最も大きな成果の一つは参加したひとり親家庭の子どもたちの非認知能力の変化とその可視化することが出来た。特に具体的な目標設定をもたず子どもたちが笑顔になって帰っていくことをビジョンとした取り組みと、本プロジェクトのようにプログラム中に具体的なミッション設定を行ったことで子どもたちの非認知能力の伸び具合が著しく違うことが解ったことは大きな成果である。
　体験格差解消事業という崇高なテーマの下で、多くのプロボノや若者(インターンシップやサービスラーニングにより)の他、新たな団体との出会いが生まれたことに勇気づけられるとともに、そのことが今後の私たちの活動を支える大きな財産になることが確信できている。スキルを有する多くのボランティアが存在し、協賛してくれる団体が現れたことによりボランティアスタッフに対する旅費交通費や謝金が確保できる見込みである。
しかし本プロジェクトのようなイベント実施やそれに伴う前準備・後片付けに携わる期間は本業の収益事業から離れざるを得ないため、その期間の対価を得る仕組みを生まない限り、難しい状況は続くと思われる。

８．結論－2　１０．知見・教訓

セオリーを変えるプログラム開発・体験を通して、成長を育む。

非認知能力とは、学力やIQといった数値で測れるものではなく、協調性やコミュニケーション力など数値では測りにくい能力全般を意味し、生きていくために必要な能力を表す。先の研究で文科省は、子ども時代に自然体験が多い子どもほど自尊心が高いという結果を示した。非認知能力と自尊心は、子どもがその子らしく成長する上で元も重要な要素の一つ考えられ、同時に密接に関係している。

本プロジェクトは、ひとり親家庭等の自然体験活動の参加機会が不足しやすい家庭を対象に、体験活動を提供し親子の自尊心と子どもの非認知能力の成長を促す事を目的とした。また、その効果を可視化する事により、提供プラグラムの内容の効果を評価し、より良いプログラム開発に活かす。その波及効果として、様々な活動提供団体が本プログラムから派生する活動に取り組んでいけると、体験格差から生じる子どもたちの自尊心のケアと非認知能力の成長を推進していく社会の醸成に繋げていく事が出来ると考える。

このような観点から、3年間に及ぶプロジェクト豊夢では、参加親子が親子関係の深まりや子ども同士の関係構築等を通して自尊心を育み、非認知能力の向上が図られ、結果的にイベント後の日常の在り方にまで影響力を保ち続ける変化を与えられるプログラムが提供できるか、が重要なポイントであった。

自然体験という特別な楽しい時間の中でも、親子でのチャレンジや達成感、友達との関係構築といった子どもにとっての重要な対人関係要素を組み込み、自分自身を見つめなおす・振り返るプログラム構成とし、提供した。

結果としては、自己評価として自己肯定領域が高まり、特に孤独感の解消や友達との対人関係の良化といった面が特に伸びた。非認知能力（社会情動スキル）の各スキル別にみると、全体的なスキルでの成長がみられましたが、その中でも特に忍耐や自制心といった子どもが特に伸びにくい領域について大きく成長を示した。また、イベント参加の回数を重ねるほど成長を示すことが結果として現れた。

親の変化としては、孤立しがちなひとり親家庭において、地域活動参加意欲や互助意識が伸びたことや、定性的には活動参加家庭同士の繋がりができ、友好関係ができる等がみられた。

また知見として、本プロジェクトのプログラム体験群と自然活動のみを行ったプログラム非体験群では、自己評価レベルでは非認知能力の各スキルでの達成度では大きな差を生じたことから、プログラムの効果があったと推測する。このような、対人的関係支援をベースに子どもの自己認識と振り返りの機会をもつ楽しい体験は、子どもの生きるために必要な力を効果的に育むと考えられ、このような視点で子どもへの様々なイベントが執り行われていくことを望む。

評価担当　認定NPO法人　皆繋　代表理事　林陽一郎